
BeautyBlade

萩原アタコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B e a u t y B l a d e

【Nコード】

N 3 7 7 1 F

【作者名】

萩原アタコ

【あらすじ】

ただ純粹に思う、それだけが私の正義。突然起こった未来都市の異変。その先に2人を待つのは……

prologue

最期の親の姿は、血まみれだった。

『母・・・さん・・・』

こんなにもたくさん鉄錆の臭いを嗅いだのは初めてだ。

カシャン、カシャン

母さんも父さんも、なんて格好してるの。

起き上がらせてほしいの？でも無理だよ。

私さつきから体のどこも動かせないの。

ずっとずっと震えてるの。

カシャン、カシャン

『父さん・・・ねえ、母さんも・・・』

私2人のこと呼んでるよ。

どうして無視するの？

また怖くなった。

『そうだ、電話・・・救急車・・・ッ』

カシャン、カシャン

『あつ・・・』

なんとかポケットから取り出した携帯電話が、震えた指の隙間から下に滑り落ちた。

拾わなきゃ。

ガチャン

『え?』

顔を上げたら、そこには白い何かがいた。

『きゃっ・・・』

自分とは違う、か細い声が聞こえる。

瞬間。

パラパラッ

『ひっ』

とっさに後ずさった。そしてもう一度前を見た。

今度は、白い何かと一緒に小さな影も見えた。

両親と同じ、赤い色をして、自分の方に手を伸ばして。

『・・・お・・・ねえちゃ・・・ん』

自分のことを呼ぶ妹の姿が。

『いや・・・陽子ひょうこ・・・そんな・・・いや・・・』

その隣で、白い何かもこっちを向いた。

あの白いのが、母さんと父さんと陽子を傷つけたの。

あんなに体を赤く汚して。

『いやああああああああっっ』

ガチャン

『ヒョウテキホソク
標的補足』

prologue (後書き)

初めての投稿です。つたない文章ですが頑張りますッ!!

1・happening after quietness

微かに始まった。

「陽子？」

受話器越しに、妹の咳の音が聞こえた。

『ううん・・・大丈夫だよ』

「体が冷えたんだろ・・・早く寝な。もう切るよ」

『うん、お姉ちゃん』

「ん？」

『明日・・・ちゃんと病院来てね』

「・・・分かったから、おやすみ」

『おやすみなさい』

・・・ガチャン、プー、プー、プー・・・

一息つくと、冬子ふゆこは静かに受話器を置いた。

リビングがまた静かになる。

もう12時・・・

冬子は部屋の真ん中に置いてあるテーブルの前に座って、リモコンでテレビの電源をつけた。一瞬で画面が映ると、テレビの中ではちやうど天気予報をやっていた。

『・・・明日の日中の気温は今日とほぼ変わりません。ただこの雲が上がってくる可能性があるので、午後はにわか雨にご注意ください・・・』

しばらくテーブルに頬杖をついてテレビを見た後、またリモコンでテレビを消して、冬子は立ち上がった。

そのままキッチンに足を運ぶと、洗い終わった食器のカゴから適当にコップを取って水を注いだ。そしてそれを飲み干すと、コップを水の張った流し台の中に漬けて、キッチンの電気を消した。

寝よう・・・

冬子はリビングの電気を消した。

未来開発都市『ユートピア』

アメリカ屈指のコンピューター企業『アーノルド社』の研究チーム所有のモデル地区として、現在アメリカ、ドイツ、日本に分布している研究都市であり、この『ユートピア03』は特に医療方面に重点を置いた都市である。

というのがこの大きな街の肩書きだ。

冬子は机に内蔵されたモニターを眺めながら、自分の長い髪を指でいじっていた。

大きなモニターの前で教師が教科書を閉じた。

「えー、時間が余ったんで後は今日の宿題に当てます。『ネットワーク接続』ボタンをタッチして、各々の課題に必要な資料を検索していただく。先生は戻りますけど。くれぐれも騒がないように。ではこのまま終わります」

目の前の生徒達にそう言って、世界史教師は教室を出て行った。その後でアシストロボットがコンピューターの前でせわしなく動いてから、先に行った教師の後を追って行った。

アシストロボットはアーノルド社の研究チームが開発した、いわゆる雑事ロボットで、ユートピア03創設時から病院や企業、学校などに導入されている。白いボディに頭部には視覚センサーが搭載されていて、首のスピーカーから音声を発し、胴の下の方から伸びた2本の足では二足歩行が可能である。近年では家庭用も開発された。教師が出て行ってからしばらく経って、教室中に話し声が広がった。騒がない程度に、普通の声で。

冬子はそんなクラスメートを一瞥して、『ネットワーク接続』のボタンに触れた。

ウンッ

「・・・？」

冬子がタッチパネルに触れた瞬間、今の今まで正常に起動していたはずのモニターとタッチパネルの画面が消えた。

プラグが外れたか？

「あれえー消えたあ？」

「うっわデータ消えたぞコレ」

辺りを見回すと、他に複数、いや全員の画面が消えているようだった。

バグか？親機はどうなってるんだ。

さっきまで教師が使っていた大型のモニターを見ても、何も映っていない。

一分も経たないうちに、次は教室の照明が消えた。

「やだ、停電？」

「雷落ちたの？」

「つか、他のビルも電気消えてねえ？」

徐々にクラスメートが騒ぎ出す。冬子もすぐ隣の窓から外を見ると、確かにここから見える建物全ての照明が消えていた。

主要な電気機器がすでに2つも駄目になっている。

落雷なんて起こっていない。発電所の方で何かあったのか？

「・・・まさか」

悪い予感が、冬子の首筋を冷やした。

冬子は急いで鞆の中から携帯電話を取り出し、陽子が入院している病院に連絡を取ろうとした。

病院の電源が落ちて機械が使えなくなったら、陽子はたちまち・・・

アドレス帳の中から『ユートピア総合病院』の項を見つけ出して、発信ボタンを押した。そしてすぐさま携帯電話を冬子の耳に押し当

てた。

しばらくの間の後、

『・・・ピーッ。電波状態の良いところでかけなおして下さい』

圏外だつて？

携帯電話の画面を見ると、左上に赤い色で圏外のマークが映っていた。

何だ、何かがおかしい。

滅多に表情を崩さない冬子の表情には、少し焦りの色が出ていた。

「うわぁっ」

ざわっとクラスメートの視線がドアの方に釘付けになる。冬子も反射的にそっちの方を向いた。

ドアの前には、教室から出ようとした一人の男子が屍餅について口をあんぐりと開けていた。

そしてその男子の前には、本来白はずのボディが何かで汚れてしまったアシストロボットが、いた。

「血・・・！？」

アシストロボットは口を開いた。

一瞬銃口が覗いた。

「伏せろ！！！！」

この教室にいる男子の誰かが、クラスメートに向かって叫んだ。

そしてまたしても反射的に、冬子はその言葉に反応してその場に素早くしゃがみこんだ。他の生徒の一部は状況を解したようで、なんとか伏せることが出来たが、それ以外の生徒は何がどうなっているのか解らずにその場に立ち尽くしていた。

誰かが言った、次の瞬間。

「あ・・・」

小気味良くパララツと機銃を連射する音が、教室に響き渡った。

「・・・ッ！！」

「い、いやああッ！！」

一気に血飛沫が上がる。

さっきは冷静に隠れていた生徒も、機銃の音を聞いた途端に立ち上がった。

今度は冬子が怒鳴った。

「立っんじゃないッ！！」

遅かった。

またもう一度、さっきと同じような音がして、さっきと同じように血飛沫が上がる。

冬子のすぐ隣に、一人の女子が額に穴を開けて崩れ落ちてきた。すぐに首筋を触ってみたが、すでに脈は無かった。

冬子の中から耐え難い感情が吹き出してくる。

かなり落ち着いているように振舞っている冬子だったが、内心驚きや焦りなんかで胸の中がごちゃごちゃになっていた。

ワケが解らない・・・どうしてロボットが攻撃するんだ。さっきまで本当に何も無かったのに。電源が落ちたのと何か関係があるのか？陽子のことはかなり心配だが、とりあえず自分も今の状況をなんとかしないと・・・自分も殺られるかもしれない。

皆殺られたのか？

冬子は首だけを動かして周りの生徒を見回した。

一向に動く気配が無い。

「あ・・・やだ・・・健ちゃん・・・ッ」

冬子の視界から外れた、教室の後ろの方で、一人の怯えて震えた声が聞こえた。

あの声は・・・そのだ園田か。

まだ誰かがこの教室の中で生きていることに、冬子は少しだけ安堵した。それから冬子は体の向きを変えて、スウツと息を吸った。そして出来るだけ身を屈めて、前屈みの姿勢になった。

園田は机の影にいるから、今は大丈夫だろう。それより掃除用具入れの中のアレをなんとか取り出さないと・・・

冬子はアシストロボットを見やった。一応銃口はこっちを向いていない。

今だ。

そして床を蹴った。

「やつ危ない！」

咄嗟に、園田が冬子の後ろを見ながら、走る冬子に言った。

「な・・・」

さっきまで冬子の進行方向とは逆向きに顔を向けていたアシストロボットが、冬子のすぐ後ろに立って、顔を冬子に向けて撃ち抜こうとしていた。口から出た銃口がまっすぐに冬子の頭を見据えている。

ガチャン

ヤバイ。

「いや・・・っ」

園田が悲鳴を漏らした。

瞬間。

銃弾が冬子の頭を撃ち抜くよりも先に、アシストロボットの頭に何かが勢いよく刺さった。

冬子は刺さった何かとその出場所を見ることができた。

これはカッター……！さっきの男子が。

胸の作動ランプが、ほんの少しの間消える。

その間に冬子は掃除用具入れを開けて中から箒を取り出した。箒の他には、数本のモップと、ちりとりと、奥の方に隠されてある何かを包んだ細長い白い袋があった。

そして冬子は持っている箒を、目の前に突っ立っているアシストロボットの視覚センサーに突き立てた。するとセンサーを覆っていた黒いガラスは割れ、アシストロボットはそのまま仰向けに倒れた。

箒は刺したままにして、冬子は掃除用具入れの中にある白い袋を取り出した。

「伊井塚^{いいつか}！」

教室の前の方に視線を向けると、さっきの男子がドアの前に立っていた。

冬子は前に進もうとした、が、立ち止まってさっきから隅の方で縮こまっている園田を見た。

「立って。行くよ」

「う．．．うん．．．」

手を差し延べて、園田に手を掴まされると冬子は早歩きでドアに向かった。途中園田は何度も教室の後ろを振り返っていた。

ドアの前に立っていたのは、クラスメートの秋吉^{あきよし}だった。

「ありがとう」

冬子は教室から出る前に秋吉に言った。園田は腰が抜けて何も言えない様子だった。

「どうも。2人とも大丈夫か？」

「一応」

「これからどうするよ」

「とりあえずここから出よう。それからだ」

そして秋吉と園田と共に3人で教室を出た。

しばらく歩いていると、次第に濃厚な鉄錆の臭いがしてくる。

その根源は、無残な姿で廊下に転がっていた。

「何これ・・・」

「・・・先生・・・」

3人の目の前には、額にぽっかりと穴を開けた、ついさっきまで3人の教室で授業をしていた世界史教師が横たわっていた。床には頭を中心に血が広がっている。

秋吉が先生の死体を傍に近寄って見た。

「うわ・・・急所を一発かよ」

「さっきのロボットだろうな・・・」

冬子は顔をしかめながら言った。目の前にさっき自分の横に倒れてきた女子と同じ所を撃たれている。

「もしかして、他の教室も俺らのとこみてえに・・・」

「え・・・何・・・じゃああたしたちもこんな風に殺されちゃうの！？皆みたいに！？ヤダ、ヤダ、ヤダよおッ！！」

「おい落ち着けよ園田！」

「いやだ・・・や・・・殺されちゃう・・・もおヤダ・・・！」

秋吉が必死で園田を宥めている横で、冬子も必死に考えていた。

アシストロボットは・・・とりあえずバグと考えていいだろう。じ

やあ日本支社の方で何かトラブルがあったのか？何にせよココは危ない。逃げるにしたって、屋内にロボットがいる限り安全とは・・・

病院、そして陽子。

「行かないと・・・！」

カシャン

不意に、冬子達の後ろで音がした。

何かが階段を降りている。

「え・・・」

園田の顔が一気に青ざめた。

冬子の脳裏に、あの時の残像が映し出されていく。

そういえば、あの時もそうだった。

「ヤダ、助けて・・・」

鉄錆の臭いをばら撒いて。

「畜生・・・ッ」

白い体を赤くして。

「・・・来る」

冬子の耳にまだ残る、あの人殺しの機械が自分のにじり寄ってくる音を響かせながら。

カシャン

それらは、3人の方を向いて歩くのを止めた。

廊下の奥の方で、血のこびりついたロボットが数十体、同時に口を開いた。

「・・・ちっ」

キュイイイイ

・・・ン

『標的補足』

ガチャン

「逃げろッ！！！！」

3人は一斉に走り出した。

1・happening after quietness (後書き)

どわあああつこんなに遅れてすみません!!!
次はもっと早くできるようもつと頑張つて書きます!

2・emergency

想像していた。

いつかこんなことが起きるんじゃないかと。

「速く！」

「走ってるよ！」

所々が血に濡れた廊下を、3人は必死で走っていた。曲がり角の多い通路を選んで、背後をとられないように。

それでもロボットはしつこく3人の後を追っていた。それも、最前列のロボットは絶えず口から銃弾を吐き出しながら。

このまま中にいるのは不利だ。いずれ追い詰められる。とりあえず外に出ないと・・・！

冬子は教室から持ち出した白い袋を肩に掛けて、絶対に落とさないようにしっかりと紐を握った。

なんとか昇降口まで辿り着くと、秋吉はハッとしたように言った。

「ヤベエ、自動ドア閉まってんぞ！」

電気が途絶えているのだから当然だろう。

「逃げらんないじゃん！もうそこまでアイツら来てるよー！」

園田が泣きそうな声で言う。冬子は白い袋の中身を取り出して、袋をそのまま捨てた。そしてうるたえる2人の後ろから言った。

「避けて」

「え？」

2人はとっさに避けた。

間から冬子が何か細長いものを持ちながら、自動ドア目掛けて突進した。

そして、それを両手で構えて、真っ直ぐに振り下ろす。

「はっああッッ!!」

ガキンッ!!

ピシィッ

「あ!!」

「なっ、ソレ刀!？」

冬子はすぐに自動ドアから引いた。刀に渾身の力を込めて叩いた割には、自動ドアのガラスには大きめのヒビが入っただけだった。

「・・・まだか・・・」

「退いてろ伊井塚！」

次は秋吉が傘立てを冬子の後ろから投げた。ガラスが豪快に割れる音と一緒に、破片が外に向かって派手に吹っ飛ぶ。

すぐ後ろに機銃を乱射する音が聞こえた。

「行くぞー!!」

秋吉が言った。3人は学校の外へと駆け出した。

瞬間、割れていない自動ドアのガラスに数発の銃弾が食い込んだ。

「無尽蔵なのオ！？まだ全然追ってくんじゃん！」

「んのヤロ・・・ッ」

「追いつかれるぞ！」

だけれど、ロボット達に背中を向けて逃げるということ事態、自殺行為にも似たようなものだ。と冬子は思った。さっき見た先生の死体と、自分の隣にいた女子生徒の死体。どちらも額に一発銃弾を食らっただけで死んでいた。つまり、それだけロボットは高性能なのだ。人の急所を打ち抜くことに関して。というより人を殺すことに関して。ここでまた疑問が生じる。何故、ただの雑事ロボットにそんな殺戮機能があるんだ？ただバグを起こしたただで、こんなにもロボットは狂ってしまうものなのか？何故ロボットが狂ったぐらいで、口から銃弾が飛び出してくるんだ？考え出したらキリが無い！

ただ、このままあいつらに背を向けたままでは、3人とも死んでしまふのは確実だ。

どうする？

「あつ」

一番端で走っていた園田が被弾した。

「園田！」

倒れかけた園田を秋吉が抱き上げると、3人はすぐ近くにあった路地に逃げ込んだ。

「セ、セーフ……」

「腕が……大丈夫か」

園田が左腕を押さえていた手を外すと、弾のかすった痕があった。制服のブラウスが真っ赤に染まっている。息が大分荒くなっていることから、相当痛いようだった。

この至近距離で、このまま逃げ続けるのはもう無理だ。

冬子が立ち上がった。左手に刀を持って。

「行く。秋吉、アンタ園田見てて」

「ちょっと待てよ、俺も行く」

「丸腰だろ。素手でどうする」

「誰が丸腰なんて言ったかよ」

すると、制服の内ポケットから銀色のナックルを二つ取り出して、手にはめた。秋吉が口の端を少し吊り上げて言った。

「どーだ」

「物騒なモン持ってんだな」

「お互い様だろ

園田動くんじゃねえぞ!」

秋吉が言ったのと同時に、2人は路地から飛び出した。ロボットは目と鼻の先にまで迫っていた。しかし、そのロボット達はさっきと比べて明らかに様子が違っていた。頭部の口が閉じていて、代わりに腕がナイフのような刃物になっているのだ。

弾切れか。さっきのマシンガンよりか遙かに都合がいい。6体、他のロボットは途中で他に照準を変えたのか。それはそれでまた都合がいい。勝算は十分ある。

「らあッ!」

秋吉が早速1体に殴りかかった。冬子もすぐに刀の柄に手をかけ抜刀すると、目の前のロボットに向かっていった。

「はあッ!」

斜め下に振り下げた刃が、ロボットが冬子の首を斬るより先にロボ

ツトの首を撥ねた。若干柔らかい素材で包まれたロボットの首は、そのまま地面に落ちた。そしてそのロボットの刃をかわし、胴を足場にする、冬子は飛び上がってすぐ後ろのロボットの脳天をかち割った。

2体いった、秋吉も・・・2体か。存外、鬼のように強いということはないんだな。

不意に、冬子の後ろからロボットが冬子を斬りつけようとした。冬子はちょうど着地したところだった。

「！」

後ろあたりで声がした。

「伊井塚！」

ガキンと、秋吉が横からロボットを一発殴った。刃が冬子の背中を突き刺す前に、ロボットは勢いよく倒れた。秋吉はすぐに冬子に声を掛けた。

「大丈・・・」

振り向きざまに、冬子は持っていた刀を秋吉の後ろ側目掛けて放った。放った刀は何かに刺さった。

数秒後、秋吉を狙っていた最後のロボットが倒れた。

「・・・強エな」

「他にいないな？」

他にロボットがないのを確認すると、2人は路地にいる園田の下へ駆け寄った。秋吉の言いつけ通り、園田はその場にジッと座っていた。

「腕、血は止まったか？」

冬子が聞いた。園田の呼吸はまだ少し荒かったが、本人は落ち着いている。園田は2人に向かって答えた。

「一応・・・何、あんたたち・・・さっきの」

「おうよ、追ってきたヤツ全部やつつけたぜ」

秋吉が園田の前にしゃがんで、後ろに倒れているロボットの方にあるごをしゃくりながら言った。ロボットが動く気配はもう無い。

「は・・・ウソ・・・」

園田は小さな声で呟いた。冬子は園田の腕にハンカチを巻いている。園田の腕が傷口から化膿しない為だ。

「ウソじゃねーし。もうアレ動かないから。保障はねーけど」

「秒殺じゃん・・・強いんだ、へえ・・・」

秋吉の満足そうな顔を見て、園田は少し安堵したようだった。冬子がハンカチを巻きながら2人に言った。

「とりあえず病院に行くよ。アンタの傷が気になるし、私も行かないといけないから」

それを聞いて、園田は不安げに冬子の方を見た。

「でもっ、病院でもロボットがあんなのになっちゃってたらどーすんの」

「その時はまた倒せばいい」

ハンカチの端を少しきつく結んだ。多分、もう血は止まっているだろう。

秋吉はニツと笑って冬子に言った。

「俺はいいぜ。まだ力にも余裕があるし。いいじゃん、もしコイツらと同じよーなのがでてきたって、俺と伊井塚が守ってやるよ。つか苗字で呼ぶの面倒くせえから下の名前でいいか？」

少し間を置いて、園田がコクリと頷いた。冬子はどうでもいいような顔をして「好きにすれば」と言った。

「じゃ今から全員名前で呼べよ、俺が^{やまと}大和で園田が^{るじ}瑠璃で伊井塚が冬子だかなっ」

妙なところで仲間意識の強いヤツだ、と冬子は思った。瑠璃の様子を見てのことだろう。誰かといないと今にも泣き出してしまいそうな顔をしている。とりあえず、今はこの3人で行動するのが一番の得策だ。この先無駄死にしないためには、全員が全員で守りあえばいい。

3人はその場で立ち上がった。瑠璃が少しふらつくと、冬子が傷が痛まないようにそっと腕を掴んだ。

「離れるんじゃないよ、絶対に」

「・・・うん」

その時だった。

「「「!?!?!」」」

ドオン、とかなり大きな爆発音が空気と地面の両方に響き渡った。

大和が叫んだ。

「何だ!?!」

「通りの方だ!」

すぐに音のした方向へと走り出すと、もう一度、同じような爆発音が鳴った。

何だ・・・何が起こってるんだ・・・!

3人は大通りに出た。煙が辺りを埋め尽くしている。何とか視界が開けたとき、最初に見えたのは炎だった。

「何だよコレ・・・」

次第に煙が空に向かって伸びていく。目の前で大型のトラックがガードレールに突っ込んで、凄まじい音を立てながら炎上していた。そのトラックの後ろには、何台もの乗用車が互いにぶつかり合って、クラクションを鳴らしたり運転手が罵声を上げたりしている。悲鳴も聞こえた。

「あ、あそこ！」

瑠璃の指差す先に、目の前のトラックと同じように燃えているビルがあった。

「・・・何で・・・」

大和が目を見開きながら目の前の光景を見ている。

きつと、ビルの爆発を見たか聞いたかして、トラックの運転手が手を狂わせたのだろう。そのトラックが道路を塞ぐように横になっているせいで、両車線とも通行止めになっている。ほとんどの運転手が外に出て、文句を言ったりすぐ隣のビル火災を見たり、目の前のトラックが炎上しているのを呆然と眺めたりしていた。

冬子が眉根を寄せながら言った。

「もしかして・・・中でロボットが暴れてるんじゃないのか」

すでにビルの両隣のビルに火の手が上がっている。辺りは煙に変わって炎で埋め尽くされていた。

突然、ビルの回転扉が開いた。

「・・・！」

瑠璃が息を呑んだ。

ロボット。

「やっぱり・・・！」

そして3人は気づいた。周りに、さっきよりも数倍数の多いロボットがいることを。口から銃口を出しているのや、腕が刃物になっているもの、どちらのロボット達も普通の様子じゃなかった。

やはり学校だけじゃなかったのか。

「・・・陽子・・・！」

冬子は唇をかんた。屋内はアウトだ。ロボットがいる。陽子のいる病室は鍵付の個室だから、ロボットから直接の攻撃は受けてないと思うけれど・・・

早く行かないと。

「行くよ！」

「お、おう」

冬子の声で2人は我に帰ったような顔をして、頷き、走り出した。すると他のロボットが3人に気づき、何体かが追いかけた。他のロボットは道路の方にかたまっている。いろいろと聞こえてくるのだが、全部悲鳴にしか聞こえない。攻撃されているのだろうか、

今3人が行った所であのロボットの数では焼け石に水である。

「なんか来てるよおっ！」

瑠璃が後ろを向きながら冬子と大和に言った。ここから病院までの距離はそう遠くないハズだから、なんとか逃げ切れる。幸いロボットの口から銃弾は飛んできていない。多分、屋外に出るまでにほぼ使い切ったのだろう。

そして後方で三度目の爆発が起きた。追いかけてきたロボットの内2、3体がその爆発に巻き込まれて粉碎している。

3人はもう何がどうなっているのか分からなくなってきた。ただ自分の本能のままに動いていた。冬子はそんな意識の中で思った。

お願いだから無事でいて、陽子。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771f/>

BeautyBlade

2010年10月21日20時19分発行